

# 森林防疫ニュース

VOL. 12  
No. 2  
(No.131)

編集■発行／全国森林病虫獣害防除協会／東京都千代田区永田町1の14国立国会図書館内 1963. 2. 1 (月刊)



## 越冬中のマツケムシ

マツケムシ(マツカレハ幼虫)は、関東地方では、マツの粗皮の間などの間隙にもぐつて越冬することが多い。これは、マツ林の近くのヒノキの粗皮下で集団で越冬していたマツケムシである。(昭和35年2月、神奈川県にて。林業試験場昆虫第一研究室/山崎三郎技官撮影)

## 目 次

### 解 説

- 富士山に発生したウラジロモミ造林木の新病害(ウラジロモミの先枯病——仮称)……………陳野 好之…6
- 針葉樹球果を食害するジャクガ2種について……………西口 親雄…8

### 観 察

- 長崎県下に発生したサクラサルハムシによるスギの被害……………滝沢 幸雄…12
- ヤドリギによるシラカバの被害……………浜 武人…16

### 紹介記事

- 欧州マツカレハの天敵昆虫……………小久保 醇…5

### 雑 感

- <ある日のSP> ノネズミ調査の一日……………館山 一郎…10

### 雑 録

- <森林防疫ジャーナル> 昭和38年度森林病虫害等防除事業予算の概要/ほか……………2

### 情 報

- <被害速報>……………14



# 森林防疫 ジャーナル

## 昭和38年度森林病虫害等防除事業予算の概要

### はじめに

38年度の「森林病虫害等防除に必要な経費」の概算要求については、本紙に一部既報 (Vol. 11, No. 11, p. 11) のとおりであるが、これについて旧蠟22日大蔵省原案が提示され、ただちに復活折衝が進められた結果、同27日査定総額は前年度の予算にくらべて48,672千円多い226,000千円と決定され、第1表のように計数整理のうえ、第43通常国会に政府案 (以下単に予算という) として、提出される運びとなったので、この機会に新予算の内容等につき概要をお知らせすることにする。

### 1. 事業の伸び等

38年度予算要求にたいする大蔵省査定額の内示は、第1次206,763千円 (事業量は、おおむね、過去3カ年の駆除実績とし、単価は前年据置き)、第2次追加17,505千円 (上記事業量に対する単価アップ分)、第3次追加1,732千円 (松くい虫防除費増額) と行なわれ、その累計額は226,000千円で、これを前年度と比較すると約28%の伸

びである。ところで、この予算の要求においては、(1)病虫害等防除対策は、造林の進展と呼応し併進せしめる必要があること。(2)人夫賃金を適正額に改訂すること。(3)駆除事務費補助金を増額すること。以上の3点を一応の柱として折衝が行なわれたものである。

まず第1の点であるが、これはいまさら説明するまでもなく、最近における森林病虫害等による被害の発生は、造林地の積極的な拡大に伴う対象区域の増加、ならびに連年の気象条件等の影響などに関連して、ますます増大する傾向にあり、その被害額も、年間およそ115億円 (35年の被害報告にもとづき試算) に達する見込みである。これは毎年の民有林の新植 (造林) 費にも匹敵するべく大な被害額であって、造林事業の成果を確実に収めるためには、病虫害等の防除対策を造林地の拡大政策と一体的に推進する必要がある。38年度の事業計画は、病虫害等別の既往の発生傾向から推定し、事業量については少なくとも前年比較において、約42%の増加を緊要としたのであるが、査定によっておよそ19%の伸びに止まった。

つぎに人夫賃の改訂であるが、人夫賃は前年度350円の予算単価で、これは農山村における労務事情や賃金等の実態からみるとあまりにもひらきがあり、かつ、事業実施上にも支障が大きいので、38年度においては460円 (農林省統一) に改めることとし、これに伴う単価増

第1表 森林病虫害等防除に必要な経費

項 目	38年度要求額	37年度予算額	差引増 Δ減	備 考 ( )は37年度を示す
	千円	千円	千円	
(項) 林 業 振 興 費	226,000	177,328	48,672	対前年伸び率約28%
(森林害虫国営駆除事業)	31,068	27,179	3,889	対前年約14%増
20 森林害虫駆除損失補償金	17,514	15,328	2,186	松くい虫、立木20,000 $m^2$ (34,188 $m^2$ )、伐跡39,500 a (3,357 a)
14 森林害虫駆除委託費	13,554	11,851	1,703	伐採木610 $m^2$ (223 $m^2$ ) 立木 16,100 $m^2$ (22,100 $m^2$ )、伐跡18,800 a (2,100 a) 伐採木550 $m^2$ (220 $m^2$ )、事務費1,942千円(1,888千円)
(森林病虫害等駆除補助事業)	194,932	150,149	44,783	対前年約30%増
16 森林病虫害等防除費補助金	194,932	150,149	44,783	補助率 $\frac{1}{2}$ , $\frac{2}{3}$ , $\frac{1}{2}$ , $\frac{3}{8}$
法定森林病虫害等駆除費補助金	178,411	107,059	71,352	松くい虫立木 137,000 $m^2$ (137,300 $m^2$ )、伐跡41,300 a (20,000 a) 伐採木 3,000 $m^2$ (1,500 $m^2$ )、くりたまばち19,600 $m^2$ (20,500 $m^2$ ) 松毛虫 13,830ha(9,300ha)、まつばのたまばえ1,200ha(1,000ha) すぎたまばえ 30,600ha(21,000ha)、まいまいか2,200ha(2,200ha) すぎはだに 5,500ha(5,500ha)、野鼠北海道 67,000ha(40,000ha) 本州 5,000ha(5,000ha)、からまつ先枯病3,525ha (0)
突発森林病虫害等駆除費補助金	4,000	30,000	Δ26,000	
有害獣駆除費補助金	2,910	2,910	0	猪及び野兎駆除
森林害虫等駆除事務費補助金	6,108	4,839	1,269	
からまつ先枯病調査費補助金	0	1,838	Δ1,838	前年度限りの経費
森林病虫害等発生消長調査費補助金	3,503	3,503	0	666 カ所

を前年比約 23 % と見込み要求したのであるが、査定で 400円とされ、引き上げの幅はわずかに 50円となった。しかしながら、ここ数年来、人夫賃改訂要求のつと、その見返りとして工期アップを余儀なくされ、事業費単価としては進歩のなかった前年までの予算と比較すれば、工期(人夫の歩掛り)前年どおりとし、単価増分約 9 % を確保できた新予算は、多少なりとも前向きとなったといえよう。つきに第 3 の柱とした事務費補助の増額のことであるが、これについては、従来、事業費の 3 % の 1/2 を積算の基礎とされていたのであるが、これでは所要額とへだたりが大きく、とうてい事業の円滑適正な推進が期待し難いので、38年度においては、第一線におけるこの事業の担い手である都道府県の害虫防除員の活動に所要する経費を積算として要求した。査定は前年どおりの基準ということになってしまったが、事業費の伸びに伴ない、事務費も 26% の増加となった。

総括的なことはこの程度に止め、以下項目別の概略にふれることにするが、補助率および負担区分については前年どおり(第 2 表参照)であり、また、対大蔵省の概算要求と査定額(成立予算額)との関連を掲げると第 3 表のとおりである。

第 2 表 補助率および負担区分

病虫害等別(駆除方法別)	負担割合		
	国	県	その他
国営駆除			
松くい虫駆除	10%	—	—
補助事業			
松くい虫立木、くりたまばち立木、野風(本州)、有害獣駆除	3%	1/2	3%
松くい虫伐跡、松くい虫伐採木、からまつ先枯病	3%	1/2	—
くりたまばち天敵、松毛虫、たまばえ、まいまいが、すぎはだに、突発害虫	3%	1/2	1/2
野風(北海道)	3%	1/2	3%
駆除事務、発生消長調査	1/2	1/2	—

備考：国営駆除の松くい虫のうち、被害立木駆除については、駆除措置以外の分(伐倒、枝落、玉切)を駆除義務者(受命者)の負担とし、これを通常事業費の 1/2 に見合うものとして処理している。

第 3 表 年度別の要求額と成立額等調

年度	要求額(A)	成立額(B)	(B) (A)	予備費 決定額 (C)	計 (B)+(C)
	千円	千円	%	千円	千円
31	339,085	231,470	68.0	—	231,470
32	251,915	192,369	76.0	—	192,369
33	213,796	161,531	75.6	10,056	171,587
34	216,637	155,135	71.5	39,623	194,758
35	260,119	170,137	65.5	30,305	200,442
36	209,556	170,137	81.0	—	170,137
37	244,418	177,328	73.0	28,229	205,557
38	351,687	(226,000)	64.3	?	226,000

備考：1. 要求額は、大蔵省に対する概算要求額を示す。  
2. 成立額は、成立予算額を示す。ただし、( ) は議決前のものをあらわす。

## 2. 国営駆除事業

森林病虫害等防除法にもとづいて行なう農林大臣の命令駆除の実施に必要な経費として、森林害虫駆除損失補償金と同駆除委託費が計上された。国営による駆除事業は、防除法の制定とともに創設され、松くい虫を対象に現在まで実施されてきている。すなわち、昭和 25 年度は 5 県(岡山、長崎、宮崎、鹿児島、神奈川)で実施、26 年度は 9 府県(前記 5 県のほか兵庫、京都、山口、熊本)の各府県)で実施、27~32 年度は 26 年実施県のうち神奈川県を除き、新たに佐賀県を加えた 9 府県に対し実施、33 年度以降現在まで 6 県(岡山、佐賀、長崎、熊本、宮崎、鹿児島各県)を対象としてきている。

この間、連年の官民一致のたゆまない駆除努力によって、年をおい被害発生を減少せしめ、また、その被害区域も縮少しつつ推移してきたのであるが、近年に至って毎年相次いで襲来する台風の影響あるいは成虫脱出期等における高温乾燥などの気象要因が関与してか、松くい虫の通減傾向が著しく鈍化し、むしろ 37 年からは全国的に軌を一にして急激に上昇再燃する徴さえあって、これがため、新たに国営駆除地区編入または拡張等を希望する府県さえあらわれてきている状況である。38 年度予算で決定となった 31,068 千円の国営事業費は、前年にたいし約 14% の増に当たるが、増額分は主として単価増に見合うもので、事業量の伸びは 1% 弱に過ぎない。また、実施予定県については、前年度実施の 6 県を指定する計画である。

## 3. 公営防除(補助)事業

### (1) 法定森林病虫害等防除費補助金

これについては、からまつ先枯病防除(後記)を除きおおむね、各害虫等の既往の実績により積算され、対前年で 36% 増となった。すなわち、突発害虫駆除費からの戻し分もあり(別項参照)、事業量としては前年比較 27% 増、単価増分約 9% である。害虫別でみると、松くい虫、松毛虫、たまばえ、野ねずみはその被害傾向とも関連して相当顕著な伸びとなったが、まいまいが、すぎはだには前年同額、くりたまばちは微減である。

なお、まつばのたまばえとすぎたまばえの駆除費単価については、数年来一元的に取り扱うよう府県からの要請が多かったのであるが、ようやくこのたび、統一(両者の旧単価により加重平均のうえプール)することができたことを附記する。

### (2) からまつ先枯病防除費補助金

この補助金は、予算上はひとまず新規であるが、すでに 37 年度において予備費等の支出によって、防除事業が行なわれているものである(注、防除面積 3,860ha、国庫補助額 32,234 千円)。38 年度は、予備費要求のさい策定した防除計画にもとづき、7,509ha を概算要求したのであるが、査定の結果 3,525ha(まん延前線 2km 以内の激害全部と中害の 1/2)となった。補助率、負担区分については、予備費の場合と同様、国 3%、県 1/2 により実施

し、1 ha当たり事業費(伐倒、集積、焼却)は14,000円(35人×400円)である。

なお、この防除費の予算化に伴ない、前年度実施したからまつ先枯病実態調査補助金は、前年限りの予算となりその継続は認められなかった。また、この防除を強力に推進するためには、防除跡地の再造林等についても手厚い助成が必要であると要望されていたが、これについては、別途38年度造林事業費において予算化された(注内地1,000ha、北海道1,700ha、拡大造林と同じ査定係数を適用する)。さらに、先枯病菌を苗木によって造林地に持ち込まさせないことは、本病防止のうえに最も重要なことである。このため、苗畑における育成管理の指導強化を喫緊とするが、38年度において別途、優良種苗確保の事項で若干の指導費補助金が積算されたことを附記する。

### (3) 突発森林病虫害等駆除費補助金

この予算費目は、33年度から計上されてきたもので、同年は10,763千円、34年、35年はそれぞれ10,000千円、36年は20,000千円、37年度は30,000千円というように予算は逐年増加してきた。これとともにこの予算の性格にもいわず突発害虫の駆除のほか、法定病虫害等の駆除に対する予備費的予算の性格が次第に強く附与されており、執行についても大蔵当局との協議を必要としていたものである。38年度においては、法定病虫害等の駆除計画が既往の実績から傾向的に把握する方式を採用した結果、この科目における予備費的要素を一応払拭することとなり、突発害虫等の駆除に必要な経費分のみを4,000千円(過去の実績)計上された。なお、この予算の実施にあたっては、適用害虫の種類およびその採択基準等の決定は、前年度に準拠して行なわれる予定である。

### (4) 有害獣駆除費補助金

この補助金については、35年度から猪捕獲柵設置費補助として行なわれてきているが、最近、野兎による被害がきわめて深刻であり、被害額も年間およそ7億円にも達している。また造林を著しく阻害している実情にかんがみ、急速に野兎を駆除し生息数を低下させて被害防止をはかり、農山村の生産意欲を向上する必要がある。よって、38年度は猪駆除のほか、新たに野兎捕獲奨励の補助金を要求したが、大蔵査定の結果、有害獣駆除費として前年同額が認められるに止まった。しかし、この予算の実施にあたっては猪捕獲柵設置補助のほか、野兎防除についても助成を行なう計画で、予算区分等の細目を検討中である。ちなみに、野兎駆除の補助は激害道府県を対象とし、市町村等の団体が行なう駆除について採択し補助率等は猪と同様とする方針である。

### (5) 森林病虫害等発生消長調査費補助金

この調査事業は、主要森林害虫等の早期発見と適期駆除等を行なうための発生予察事業の基礎資料を得ることを目的として、34年度に発足したものである。しかし、この調査は都道府県の事業として、初年度に562カ所の

調査地を設け、2年目(35年度)に104カ所増設して、調査全体計画を法定害虫7種666カ所とし、以降現在まで実施し着々成果を累積しつつある。38年度においては突発害虫の調査新設を要求したが、これは認められず既定計画分の継続調査に必要な経費として、前年同額が計上されたものである。なお、この事業は、やがて予察事業に進むことを目標とするもので、当面5カ年を第1期として実施してきたが、38年度はその5年目に当たるので、この予算について熱意のある実行と成果の集約について、一段の努力を重ね、39年度以降の第2期計画への展望を確立する必要がある。

### おわりに

38年度防除予算(226,000千円)をこれが所属する一般会計の林野庁非公共事業17事項でみると、総額2,700,667千円に対し約8.4%に当たり、林業試験場運営637,590千円(23.6%)、普及指導556,849千円(20.6%)、林業振興資金融通350,000千円(13.0%)、森林計画342,576千円(12.7%)に次いで5番目の規模である。また、これを、前年度に対する増加額でみると、林業振興資金融通(350,000千円、新規)、林業試験場運営(71,284千円、うち人件費分57,279千円)、研修施設新営(50,750千円、庁舎建設の新規)、病虫害防除(48,672千円)、普及指導(42,510千円、人件費分)という順で4位を占めている。林野庁非公共事業は、事項が多いにもかかわらず予算の総枠は比較的小さいのであるが、この中にあって、病虫害防除予算がいわば、白眉とも一応いえる伸びを確保し、あわせて31年度以降久しく念願してきた2億円の大台に乗せることができたことは、まずまずの成果であり、ご支援をいただいた関係各位に深甚の謝意を表するとともに、今後のよりよい発展のため一層のご協力をお願いする次第である。<林野庁造林保護課/出川和市>

### 予算会議開かる 林野庁

昭和38年度の保護関係予算の配分等について打合せする予算会議は、2月13日から21日まで東京小石川の林野センターに全国各府県の担当官を集めて開催された。

### 三重で松の移動制限

#### ◎三重県告示第15号

森林病虫害等防除法(昭和25年法律第53号)第5条第1項の規定により、松くい虫の附着している伐採木等の移動を、次のとおり制限する。

昭和38年1月11日

三重県知事 田中 寛

- 1 区域及び期間  
熊野市、南牟婁郡一円 昭和38年2月1日から昭和39年1月31日まで
- 2 森林病虫害等の種類  
カミキリムシ科、キクイムシ科、ゾウムシ科に属する松くい虫
- 3 行なうべき措置の内容  
松くい虫が附着している伐採木等ははく皮し、その樹皮を焼却した後でなければ、移動してはならない。

## 欧州マツカレハの天敵昆虫

小久保 醇

東大農学部森林動物学教室

まえがき

最近、東ドイツのマツカレハ (*Dendrolimus pini* L.) に関する研究論文を読んだところ、論文のやく半分が天敵の研究にさかれていた。論文にあげられた天敵をくわしく紹介するとながくなるので、天敵昆虫の種名を列举する程度にとどめるが、ここにご紹介してみなさんのご参考に供したい。

なお、参照した文献は次のとおりである。

1. Wiegand, H. (1956) : Gradologische Untersuchungen über den Kiefernspinner (*Dendrolimus pini* L.)  
I. Zeit. ang. Zool. 43, 307-355.
2. .... (1957) : Do. II. Zeit. ang. Zool. 44, 19-59.
3. .... (1957) : Do. III. Zeit. ang. Zool. 44, 129-172.

## 1. 卵期の天敵昆虫

- Trichogramma evanescens* WESTW.  
(タマゴヤドリコバチの1種)  
*Telenomus laeviusculus* (RTZBG.)  
(クロタマゴバチの1種)  
*Sphegigaster solitarius* (HTG.)  
(コガネコバチの1種)

## 2. 越冬幼虫期の天敵昆虫

- Meteorus bimaculatus* (WESM.)  
(コマユバチの1種)  
*Apanteles ordinarius* (RTZBG.)  
( " )  
*Apanteles nemorum* (HTG.)  
( " )  
*Exochilum giganteum* (GRAV.)  
(ヤドリバチ類の1種)

コマユバチ3種はいずれもマツカレハの幼虫から脱出するが、ヤドリバチはマツカレハの蛹からも脱出する。

## 3. 蛹期の天敵昆虫

- (i) マツカレハの幼虫期に寄生するもの  
*Sturmia inconspicua* MEIG. (= *Argyrophylla bimaculata* HTG.)  
(ヤドリバエの1種)  
*Sturmia scutellata* R.-D. ( " )  
前者はマツカレハの前蛹、蛹から脱出し、後者

は老熟幼虫へ蛹から脱出する。

- Phryxe vulgaris* FALL. (ヤドリバエの1種)  
*Blondelia nigripes* FALL. (= *Lydella nigripes* FALL.) ( " )  
*Nilea pavidata* MEIG. (= *Pales pavidata* MG.) ( " )  
*Exorista larvarum* L. (= *Tachina larvarum* L.) ( " )

これらの寄生率は一般に非常に低い。

- Sarcophaga tuberosa* PAND. (ニクバエの1種)  
*S. schützei* KRAM. ( " )  
*S. uliginosa* KRAM. ( " )  
*Agria affinis* FALL. ( " )

*Sarcophaga* 3種はマツカレハの老熟幼虫、前蛹、蛹から脱出し、*Agria* は前蛹、蛹から脱出する。これらのうち、とくに *S. tuberosa* の寄生率が高い。

- Muscina pabulorum* EALL. (イエバエの1種)  
*M. stabulans* FALL. ( " )  
*Fannia scalaris* FABR. (= *Anthomyia pini* HTG.) ( " )

最初の1種はマツカレハの老熟幼虫から脱出する。後の2種の寄生率は低い。

## (ii) マツカレハの前蛹期に寄生するもの

- Delomerista mandibularis* (GRAV.)  
(ヒメバチの1種)

*Epiurus bernuthi* (HTG.) ( " )

*E. inquisitor* (SCOPE.) ( " )

*Iseropus mussii* (HTG.) ( " )

*Pimpla examinador* (FABR.) GRAV. ( " )

*P. instigator* (FABR.) GRAV. ( " )

## (iii) マツカレハの蛹期に寄生するもの

- Tetrastichus xanthopus* (RTZBG.)  
(ヒメコバチの1種)

## 4. 二次寄生昆虫

*Theronia atalantae* (PODA) (ヒメバチの1種)

*Monodontomerus minor* (RTZBG.)

(オナガコバチの1種)

いずれも *Exochilum giganteum* (GRAV.) (ヤドリバチの1種) に寄生するが、前者は老熟幼虫、後者は蛹に寄生する。

*Hemipenthes morio* L.

(クロバネツリアブ類の1種)

本種はニクバエに寄生する。

## 富士山に発生したウラジロモミ造林木の 新病害 (ウラジロモミの先枯病—仮称—)

陳 野 好 之

林業試験場樹病研究室

富士山の南側、つまり静岡県側の標高約1,200m以上ではカラマツ造林木の生育が悪く、このために最近ではカラマツに代わってウラジロモミの造林がかなり積極的に取りあげられているようである。とくに静岡営林署管内ではその造林面積が約700haにも達しているといわれる。これらの造林地は天然広葉樹跡地に小団地ずつ造林されたものが多く、大部分は約15年生以下のものである。これから述べるウラジロモミの病害は、このような若い造林地に発生したものである。

病状はカラマツ先枯病に似ていて、主に新梢が侵され被害の甚しいものは箒状となる(写真1)。目下のところ局所的な被害にとどまっているが、ウラジロモミの病害としては未知のもので、新梢を侵して若い木の上長生長を妨げる点から、被害は軽視できない。また現在は広葉樹林内に小団地として造林されているが、今後かなりの面積にわたって造林された場合、被害が急激に広がる危険はないとはいえない。ウラジロモミの造林は富士山のみに限らず、カラマツ造林不成績林の増加とも関連して、今後各地域でもかなり増加するといわれているが、これにともなってこれらの地域でも本病害の発生の危険が予想される。

以上のような理由から、本病について現在までに明らかにされた点を報告することにする。これに類似の被害

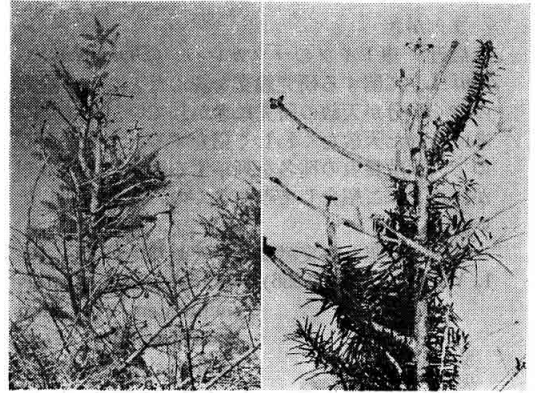


I. 梢頭部の被害状況

を発見した場合、その被害状況の通知、標本の送付等について協力いただければ幸甚である。

### 被害発生の経過と被害地の概況

私どもがこの被害をはじめて知らされたのは昨(1962)年8月静岡営林署の係官から、病害鑑定を依頼されたときである。このときの標本では、枝の先端部分が落葉枯



II. 衰弱木

死し、健全部との境界より先の方がくびれて細くなっていた。また被害部には黒色の子ノウ盤が認められたがすべて未熟であった。その後9月に機会を得て現地を調査し、さらに11月、千葉樹病研究室長にも被害地をご覧願った結果この病害の概況をほぼつかむことができた。

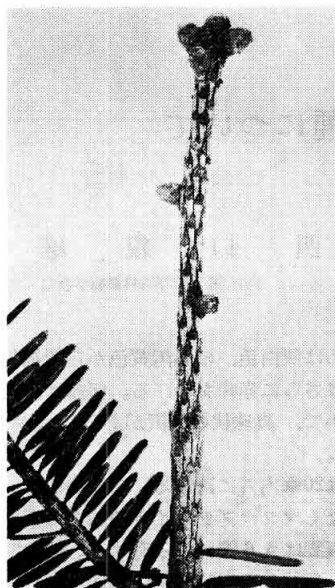
このような被害が現地で発見されたのは昭和33年ころで、当時のごく一部で、しかも軽微な被害であったらしい。1昨年あたりから一部の造林地ではかなり病状が進み、そして昨年にはいつから急速に衰弱木が目立ってきたとのことである。

被害地は静岡県吉原市、静岡営林署管内の造林地の一部である。標高は約1450~1500mで、この辺の造林地は先にも述べたように、主として天然広葉樹の伐採跡地に造林された樹齢7~17年生のウラジロモミである。被害の最も激しいところは昭和21年植栽の3つの団地で、約1.3ha、3~4,000本である。この地点では多くの個体が写真I、II、IIIのように梢頭部および枝の先端部が枯れて衰弱し、樹型が変形して枯死するものも認められた。このほかの造林地でも数カ所に軽微な被害を認めたが、私どもが調査したところではごく限られた範囲にしか確認されていない。

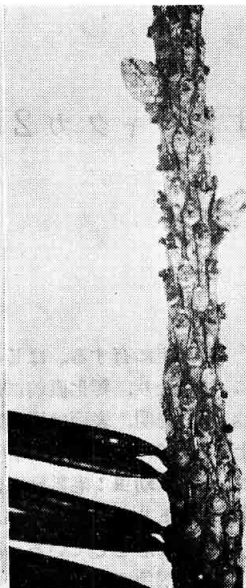
### 病徴

病徴は被害発生部位によって3つに分けることができる。その第1は最も多く認められる徴候であるが、当年生の新梢の先端が枯死するものである(写真IV、V)。被

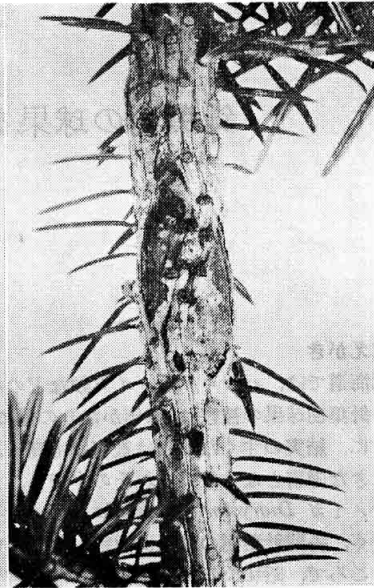
B7704



III. 先端が枯死し不定芽を出している



IV. 梢頭部の被害  
くびれて死芽をとどめる



V. 皮目より黒色の子嚢盤が発生



VI. 芽を中心がんしゅう状となる  
(芽の周辺に黒色子嚢盤がみられる)

害を受けた新梢部は健全部との境界付近からくびれて全体が細くなっており、全く落葉して死芽をとどめているのがその特徴である。健全な基部では緑葉を着生し、往々にして不定芽の伸びているのがみられる。しかしカラマツ先枯病のように先端が下垂したり、ヤ

(子嚢菌の1種)の寄生によるものと思われる(写真V, VI), 現在この菌の病原性その他について検討している。また病気の発生には気象条件などの環境条件が誘因として深い関係をもっているように考えられる。このような発生環境因子については今後の調査によって解明したいと考えているが、発病地付近の環境条件として目立ったことは次のとおりである。

一般に富士山の静岡県側では西の方から東の方にゆくにつれて霧が多くなるといわれ、被害地付近ではかなり霧が多く、とくに梅雨から夏にかけては連日のように発生するらしい。この付近の土壌は B<sub>D</sub> 型で A 層は概して団粒状構造をなし、その深さ約 20cm, B 層への推移は漸变的である。一般に峯筋は B<sub>D</sub> のドライ型であるが凹地では過湿となるところが多く、また場所によっては礫が裸出するところがあるといわれる。

わが国で現在までに知られているモミ類の病害には、葉を犯すもの、幹、枝を犯すもの等数種がある。葉の病害としては葉ふるい病(病原菌 *Lophodermium nerisequum*)、落葉病(*Lophodermium abietis*)、アデロプス落葉病(*Adelopus nudus*)、れつはがれ病(*Dendrophoma abietis*)等で、本誌上でも魚住氏がその概要を述べている(Vol. 9. 103-104)。枝幹の病害にはがんしゅう病(*Dasyscypha abieticola*)、胴枯病(*Phomopsis* sp.)があり、このほかに誘菌によるてんぐ巢病(*Melampsorella caryophyllacearum*)が著名である。(以上は伊藤一雄著、林木病害診断法(針葉樹編)および図説樹病新講を参照のこと)。

ニを漏出するものはごくまれである。つぎは前年伸長部に着生する芽を中心がんしゅう状を呈するものである。写真VIのようにこのがんしゅう部では周囲の表皮が裂け、癒合組織が発達していくぶん膨らみ、その中心には死芽の着生が認められる。第3のタイプは幹および枝の古い部分に典型的ながんしゅう症状を呈するものであるが、これはおそらく第2の病状の古いものではないかと考えられるが、あるいは他の原因によるものか不明である。

### 被害の原因

被害の原因については現在のところ確定できていないが、被害部にかなり高い湿度で認められるある種の菌

このような既知病害と今回発生した病害を比較してみ  
(13ページ下段に続く)

## 針葉樹の球果を食害するシャクガ2種について

西 口 親 雄

東京大学森林動物学教室

## まえがき

北海道では、ハマキガ、メイガ類などの小蛾の幼虫による針葉樹球果の被害は、毎年かなりの量になっている。ことに、結実のすくない年は被害率も高く、タネ生産上の大きな障害となっている。その中でも、とくにマツマダラメイガ *Dioryctoria abietella* は広く分布し、個体数も多く、各種針葉樹の球果に激害を与えている。

ところで、昭和33年、東京大学北海道演習林の天然林から採取されたトドマツの球果は、30%ほどが虫害をうけていた。はじめは、マツマダラメイガの被害だろうと思っていたが、調べてみると、ほとんどがシャクガの幼虫によるものであった。飼育した結果、それはフトオビヒメナミシャク *Eupithecia gigantea* であった。また、見本林のストロブマツ球果を調べてみたところ、マツマダラメイガとともに、本種の幼虫がかなり発見された。さらに、昭和35年、その前年に採取されたドイツトウヒ球果から、オオクロテンカバナミシャク *Eupithecia strobilata deprunneata* の成虫数頭を得た。以上のことから、北海道では、針葉樹の球果には、ハマキガ、メイガ類とともに、シャクガによる被害もすくなくないと考えられる。

しかし、これらのシャクガ類は幼虫形態、生態、加害状況が一見マツマダラメイガのそれとよく似ており、また事実両種が一つの球果に混棲していることもある。それゆえ、シャクガによる被害がマツマダラメイガによるものとまちがえられるおそれは十分にある。ESCHERICH も *Eupithecia strobilata* (日本産のものは亜種になっている) と *Dioryctoria abietella* の被害を混同しないように注意している。

上述のシャクガ2種については、わが国では成虫が知られているのみで、幼虫形態あるいは生態に関する記録はない。よって、ここにそれらを簡単に記載しておく。この報告をまとめるにあたり、種の同定をしてくださった井上寛氏に深謝する。

## フトオビヒメナミシャク

*(Eupithecia gigantea* STAUDINGER)

## 形態

成虫：開張22—31mm、形態は写真1、および文献2を見られたい。

卵：ダ円形、底面は平板で、その近辺には浅い点刻を

粗に有する。はじめは灰白色、のち汚黄色から黄褐色になり、孵化直前にはさらに赤味をおびる。卵殻は白色半透明、表面は滑らかで、真珠状の光沢がある。大きさ0.7mm×0.9mm内外。

幼虫：老熟幼虫は20mm内外に達する。いわゆるシャクトリムシの形ではなくマツマダラメイガの幼虫によく似た形をしている。腹脚はA6節にのみ有する。体は暗青褐色で、青味の強い個体から赤味の強い個体まで、体色に変化がある。腹面は淡色。頭部は赤褐色で深い皺を密に有する。胴部の刺毛は灰黄色で比較的太く短い。刺毛基盤は円形またはダ円形で、暗褐色を呈し、かなり明瞭である。気門は円形で、黒褐色環を有する。腹脚の鉤爪は2列式で、暗褐色を呈する。尾背板は汚黄色。

蛹：体長12mm内外。赤褐色を呈する。腹部9、10節以外の節には、大きな円形の点刻をやや密に有する。気門は暗色、長ダ円形でやや突出する。腹部10節背面の前縁は黒色の鋸歯状を呈する。尾端突起は二又で、先端はとがる。尾節には3対の鉤状剛毛を有する。

## 経過習性

年1回の発生、北海道では6月中旬から7月に出現する。卵は球果の鱗片の間隙に、1コないし数コ産下される。産卵状況はマツマダラメイガによく似ている。

卵の孵化は7月中旬ごろよりはじまる。孵化幼虫は直ちに、球果の鱗片の面から、内部に穿入をはじめめる。8月中旬になると、早い個体はすでに老熟している。しかし、幼虫による加害は7月中旬から9月中旬まで観察され、8月中旬には发育程度の異なる幼虫が混在する。

老熟幼虫は球果より脱出、地中でまもなく蛹化する。蛹化は、自然状態では土の中ではなく、落葉層と土の境目あたりで、細かい落葉を薄膜の上面につづってマユを作り、その中で蛹化する。マツマダラメイガも、やはり落葉層で、落葉をつづって越冬用のマユを作るが、そのマユの形態はひじょうによく似ていて、区別がつけられない。ただ、フトオビヒメナミシャクは蛹態で冬を越すが、マツマダラメイガは幼虫態で冬を越す。

## 被害

前述のように、天然林のトドマツ球果に被害がすくなくない。トドマツの場合、1つの球果に本種の幼虫は1～3頭寄生する。食害がすすむと、虫糞が排出されて、球果の外側に附着する。球果の内部には大きな孔道がほ



られ、完全に破壊される。この食害状況はまたマツマダラメイガのそれとよく似ている。本種の被害は主としてトドマツにみられるが、ストローブマツ球果でもすくな

くない。

分 布

北海道、本州、九州、樺太、アムール、ウスリー

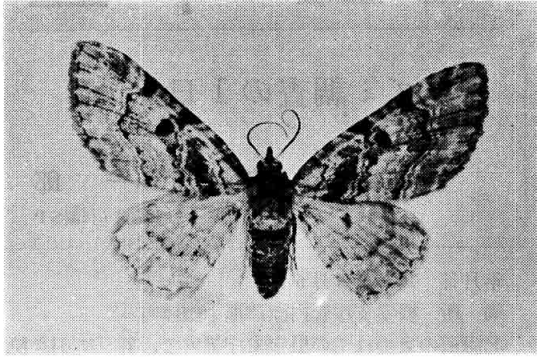


写真 1 フトオビヒメナミジャク成虫

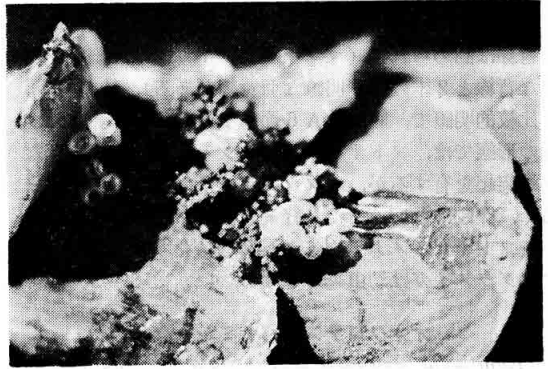


写真 3 フトオビヒメナミジャクの卵殻  
(ストローブマツ球果)

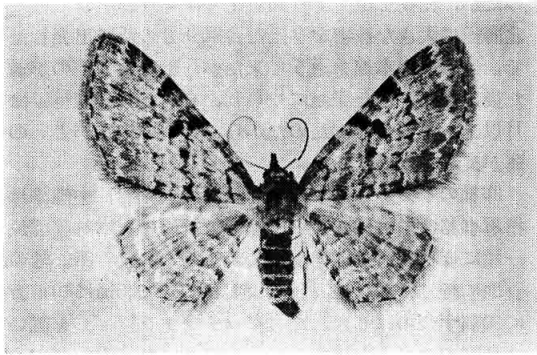


写真 2 オオクロテンカバナミジャク成虫

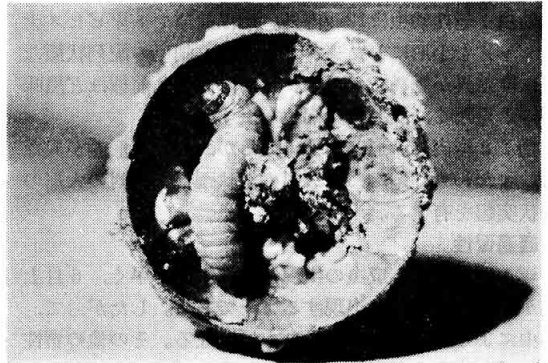
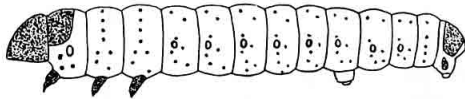
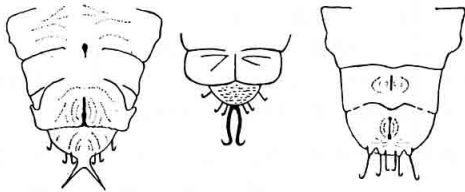


写真 4 フトオビヒメナミジャクの幼虫



第1図 フトオビヒメナミジャクの幼虫



第2図 蛹の尾端、左からフトオビヒメナミジャク、  
オオクロテンカバナミジャク、マツマダラ  
メイガ

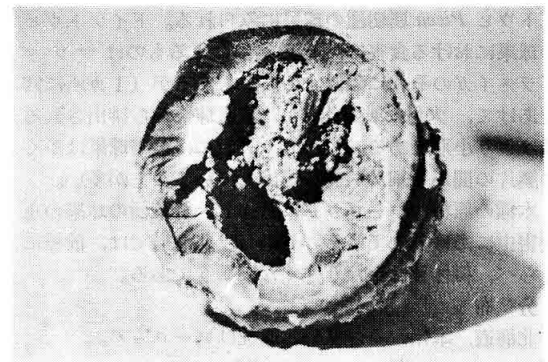


写真 5 フトオビヒメナミジャクの被害  
(トドマツ球果)

マツマダラメイガとの区別

前に述べたように、ESCHERICH は *Eupithecia strobilata* と *Dioryctoria abietella* の被害を混同しないように注意しているが、*Eupithecia gigantea* は一そうよく *D. abietella* に似ている。しかし、つぎの点で容易に区別できる。すなわち、フトオビヒメナミシヤクの幼虫はマツマダラメイガの幼虫にくらべ、青味のつよい色で、背線、亜背線は認められず（マツマダラメイガには、細い不明瞭な背線と2本のやや明瞭な亜背線がある）、体のイボが比較的明瞭で、腹脚はA6節に1対しかない。また、蛹の形態では、フトオビヒメナミシヤクは二又の大きな尾端突起を有するが、マツマダラメイガでは、尾端はまるく、突起はない。また、経過習性もお互いに似ているが、フトオビヒメナミシヤクが蛹越冬をするに対し、マツマダラメイガは幼虫越冬をする。

オオクロテンカバナミシヤク

(*Eupithecia strobilata deprunneata* STAUDINGER)

形態

成虫：開張18~22mm、形態は写真2および文献2をみられたし。

幼虫：老熟幼虫は12mm内外。形は前種フトオビヒメナミシヤクを小形にしたようなもので、刺毛の配列状態などには差異が認められない。ただ、体色は前種ほど黒味がつよくなく、淡い汚赤褐色を呈する。

蛹：8mm内外。形は前種に似るが、尾端の形態が異なる。すなわち、尾端には3対の鉤状剛毛と1対の大形の鉤状突起を有する。

経過習性

年1回の発生。成虫の出現は前種よりも早く、6月上旬から下旬にかけて出現するようである。したがって、幼虫による食害期は前期よりも早くなる。その他の習性は前種とほとんど同じと考えられる。

被害

本種の被害は、主として、エゾマツ、ドイツトウヒなどトウヒ *Picea* 属樹種の球果にみられる。ドイツトウヒの球果における食害は、老熟幼虫によるものはマツマダラメイガのそれに類似することもあるが（1カ所に穴をあけて、大量に糞を出す）、被害球果から排出される糞はより小形である。しかし、一般には被害球果は多くの鱗片の間から細かい糞を排出していることが多い。

本種の原種はヨーロッパに分布し、針葉樹の球果の重要害虫にあげられている。しかし、北海道では、前種にくらべ、個体数はかなりすくないようである。

分布

北海道、本州、ウスリー。原種はヨーロッパ。

文献

K. Escherich : Die Forstinsekten Mitteleuropas III. 1931.

井上 寛・他：原色日本蛾類図鑑 1958.



ノネズミ調査の1日

館 山 一 郎

北海道 / 保護SP

年月日 1962年 8月 5日

場 所 根室支庁管内標津町なかしべつ

北海道の東のはての根室支庁管内で、昨日に引き続いて、のねずみ調査の実地指導を行なう。8月3日に札幌を出発して根室市に行き、4日根室市より中標津町にきたのだが、札幌を出てより到着まで雨降りばかりだった。北海道に大きな被害を与えた台風9号の前に出発したので、無事根室本線を通うて来たが、私の乗ったのが通うた後は線路がずたずたにやられ、有名な狩勝峠付近は1月以上も不通となったのだから、日頃の精進がよいので運が良かったのだろう。

昨日の午後から雨も止み今日は好天気で、中標津林業指導事務所アと中標津町役場の内林務係長と一緒に森林病虫害等発生消長調査ののねずみ第26号の調査地に行く。造林地、沢地、天然林の各0.5haに10m方形に50個ずつのはじきわな（ギロチントラップ）を置いて3日間のねずみを捕獲して、そのせい息状況を調査するのであるが、今日はこの最終日である。今日捕えたのは次のとおりになった。

	エゾヤチネズミ		エゾトガリネズミ	
造林地	1合	2♀		0
沢地	2合	1♀	2合	性不明 1頭
天然林	2合	2♀	1合	1♀

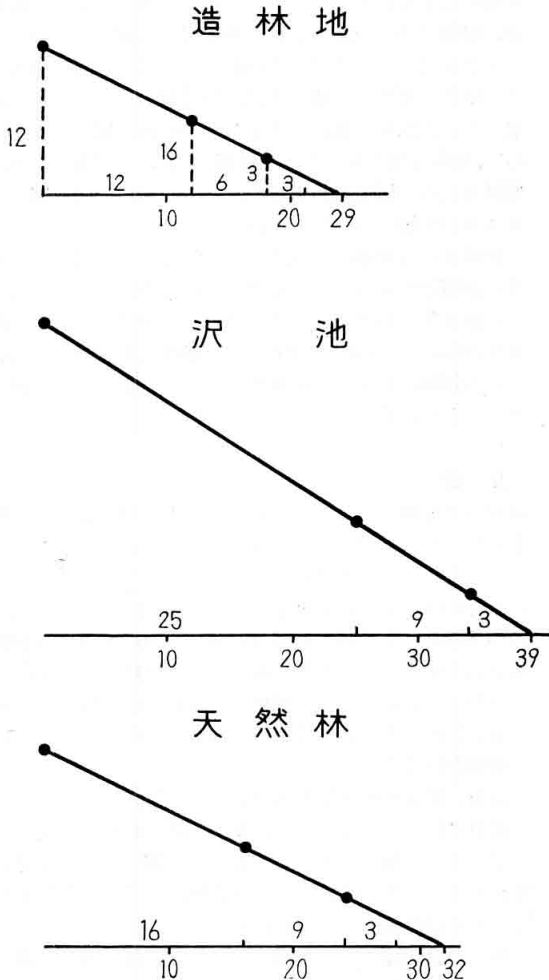
これらをフキの葉の上に並べて、モノクロームはアサヒペンタックスで、カラーはニコンFにマイクロ・ニックールをつけて記録写真を撮る。次にこれらを1頭ずつ測定し、村田アにノートして頂く。このうちエゾヤチネズミは次のような測定値となったが、1~3は造林地4~6は沢地、7~10は天然林の分である。

番号	性	成幼	体長	尾長	耳長	後足長	体重
			mm	mm	mm	mm	g
1	♀	成	98	44	14	19	27
2	♂	〃	93	47	15	19	27
3	♀	〃	105	50	16	20	30
4	♀	亜成	96	39	13	19	25
5	♂	成	96	45	13	20	28

6	合	成	101	44	15	19	28
7	♀	〃	89	47	14	18	26
8	合	〃	101	46	15	19	41
9	合	〃	96	48	14	19	40
10	♀	亜成	89	36	13	18	25

のねずみの調査には 200g の銀ばかり (秤) を持って歩くのだが、今回は入れたつものリュックに入っていない。昨日から中標津町でこれか、この代用品を探したがないので、体重は私の手のひらをはかりの代用品として調べた。昨年後志、空知支庁管内で A G さん達に集

野ねずみ棲息予察調査推定棲息数計算図  
中標津町 Aug. 3~5. 1962.



て頂いてこの調査の指導の時に「ノネズミ体重あてコントロール」というものをやり、これを北海道林務部編集の「林」という雑誌に連載した「ネズミこぼれ話」の②にこの標題で書いた。これは捕れたのねずみを集会者に廻して、その体重を言うのを書いておき、最後に銀ばかりで測定してその差を出すのだが、初めは誤差も多いが少

しなれるとはかりで測定するのと、手のひらにのせる方法との差は、1頭あたり1~3グラムで、私の場合は1グラムくらいの誤差なので、ここに書いた体重も大きな誤りはないと思う。

次にのねずみの解剖となるが、これは繁殖状況の調査と、外見上の性別の判断を切って見て誤りが無いかを見て Ag さんの自信をつけるために大切である。昨日同様私が解剖し、村田 A G にも解剖して頂いたが、なれたらねずみの腹を切るのも、紙を切るのも、同じような気持ちになる。今日の結果は1頭に小さな胎児が14頭入っていただけで、他は妊娠なし。またどれも出産の経験はない。雄の方はこう丸が7~12ミリメートルで、どれも大きくなっている。昨日解剖した分にも妊娠個体があり、幼獣やほ乳中の個体も見られたので、本夏この地方で夏繁殖があり、また本年生まれた個体が多いので、これからさらに数が多くなりそうだ。8月3~5日の3日間は捕えたのねずみはエゾヤチネズミだけで、他のミカドネズミ、エゾアカネズミ、ヒメネズミは見られず、トガリネズミの類は合計で7頭とれた。エゾヤチネズミの日毎の状況は次のようになっていた。

	8月3日	4日	5日	計
造林地	8合4♀	4合2♀	1合2♀	13合8♀
沢地	18合7♀	7合2♀	2合1♀	27合10♀
天然林	10合6♀	6合2♀	2合2♀	18合10♀

これによって推定せい息数を計算したら左図のようになり、捕獲実数と推定数等は次のようになった。

	0.5ha	1ha	0.5ha	1ha
	捕獲実数	換算数	推定棲息数	換算数
造林地	21	42	24	48
沢地	37	74	39	78
天然林	28	56	32	64

どう見てものねずみの数は非常に多いし、今回解剖した全部の中で出産の経験のあるものは3頭だけで、若いねずみが多いのに、これから9月から10月にかけての繁殖を考えると、まったく恐いことだ。

これでこの調査を終ったので、中標津町有林を見たがこのカラマツ造林地の下草の間にのねずみの通路がそこここに見られ、どう見ても本年はこの地方では異常発生らしいので、十分注意するように村田 A G、大内係長に話した。

本日の用務も終ったので、列車の状況はどうだろうかと駅に行って聞いて見たら、台風9号の被害は想像以上にひどく、不通箇所はひどく多く、根室本線は勿論どの線を通うても札幌には行けないとのことである。明日はどうかと聞いたら、駄目だろうとの事なので、それでは知床半島に行って見ることにしようと、この方の様子を聞いたら無事開通しているとのことであった。

汽車で根室標津駅に行き、さらにバスに乗り本当のわが国の東のはて、知床半島の羅臼町に着いた。この街で夜の蝶をとりに出かけ、非常に多くの獲物を得たが、ここでは省略することにする。

## 長崎県下に発生したサクラサルハムシによるスギの被害

滝 沢 幸 雄

長崎県総合農林センター

スギを加害するハムシ科昆虫については、すでにスギハムシ、ケブカスギハムシ、ホタルハムシおよびコフキハムシなどが知られており、本誌上にそれぞれについて紹介されている。

サクラサルハムシ *Cleporus variabilis* (BALY) は別名ヒトミヒメサルハムシとも呼ばれ、従来からヒガンザクラ、カイドウなどの葉を加害することが知られているが、スギを加害することはまだ知られていないようである。

昭和37年7月24日にこの被害に気付いた時は、すでにスギの新梢先端部が褐色に変わっていた。加害中の黒褐色の小さなハムシ成虫を採集して調べてみたが、既知のスギを加害するハムシでないこと、成虫の色彩の変化が著しいことなどから疑問をもち、香川大学の中条博士に種名の同定をお願いしたところ、サクラサルハムシであることが判明した。

しかも、スギを加害することは新知見であるのご教示をいただいたので、参考までにその発生の概況と加害状況などについて紹介してみたい。

### 被害発生地の概況

被害発生場所は、長崎県諫早市貝津町総合農林センター附属実験林のスギ造林地である(昭和36年度に地元の貝津町より買収)。この造林地は海拔100~150m、北西に面し傾斜は15~25度で、山の中腹より谷に位置している。基岩は三紀層で、土壌型はB<sub>0</sub>(d)型であった。下草はカヤを優占種としてワラビ、サルトリイバラ、ヤブムラサキ、アカメガシワ、タラノキ、ビロウドイチゴなどであった。

造林されているスギは地スギの実生で、樹齢は10年生面積は1.52ha、ha当たりの植栽本数は6,000本である。この造林地にはスギと一緒に1割程度のヒノキが混植または筋状に植栽されている。スギの生長は悪く、林分の平均樹高は2.5m、平均根元直径は4.7cmである。

### 成虫の外部形態

形態についての詳細は中条博士著の「図説食葉はむし類」を見ていただくことにして、その概要を上げれば次のとおりである。

体長は雌3.00~3.25mm、雄2.75~3.00mm。体色は黒色

のものから褐色のものまであって、きわめて変化に富んでいて、種名が示すように *variabilis* そのものである。本種の基本型は黒色を主として顔面、触角の基部、前胸脚、翅鞘肩上部の斑紋および翅端部が赤褐色のものであるとされている。貝津町の被害地で、採集された標本では、体色は黒色で頭楯、上唇、小腮鬚および各基節が暗褐色で、各転節、腿節、胫節および附節が褐色であるものと、体色は黒色を主として頭楯、上唇、小腮鬚が黄色、翅鞘部上の小楯周辺が黒色で、その他の部分は赤褐色、各基節が黒褐色の個体が多かった。

体形はほぼ卵形、頭頂は凸状に隆起して点刻を欠き平滑、頭楯は円みのある三角形。触角は糸状で11節からなり、雌は体長の半分よりやや短かく、雄はやや長い。前胸背の幅は長さの約1.5倍ある。翅鞘は前胸背より幅広く、各翅鞘に11条の点刻縦列を有する。腿節に一小歯状突起を有し、爪は2枝に分かれ内枝は外枝より短かい。

### 生態

成虫の出現期について中条博士は、過去の記録と現有標本から、6月中旬と7月中旬ということが判るだけであるとされている。筆者の観察では7月24日に被害を発見した時には、すでに針葉が加害を受けて変色していたものが見られ、8月14日、22日に調べた際にも成虫の加害が認められた。9月6日に調べた時には成虫の発見はできなかった。したがって成虫の出現期は中条博士の記録と考え合わせると、6月中旬~8月下旬に発生するものと推察される。

なお、発生回数は年1回のようにである。

成虫は日中、夕方ともに針葉上に認められた。成虫に近づいたり、触れたりすると直ちに飛翔することなく、脚をまるめて地上に落下して地被物にかくれる習性がある。交尾は針葉上で行なわれる。

卵、幼虫、蛹について調べるために土壌を掘って調べたがこれらを確認できなかった。また飼育箱に土を入れて飼育してみたが産卵は見られなかった。したがって、卵、幼虫、蛹については今後の調査にまたねばならない。

本虫の分布は本州、四国、九州、朝鮮、支那、東シベリヤである。

### 被害状況



第I図 加害中の成虫

第II図 加害をうけた初期の針葉

第III図 加害をうけてやや萎凋をはじめた針葉

成虫は造林地および室内飼育のいずれの場合でも、当年伸長枝の針葉を好食するので、被害は枝の先端部に多い。

加害する場合は針葉に静止して嚙食するが、飛来した成虫では、葉の先端部に移動して嚙食を開始する。加害は針葉の縦軸に沿って表皮を食い破り、葉肉を浅く嚙食する(第I、II図)。被害葉は当初葉色に顕著な変化は見られないが、2~3日すると葉は萎凋して赤褐色に変わる(第III図)。

被害林分での虫の棲息密度はあまり高くなかったので大きな被害は受けなかった。加害の著しかった枝では先端部が枯れたが、このために枯死したスギはなかった。しかし加害部位が生長部であるので、大発生などにより虫の密度が高くなった場合は、警戒を要するものと思料

される。

同じ造林地に植栽されているヒノキには被害の徴候は認められなかった。

なお、幼虫が確認できなかったので、幼虫の食餌については不明である。

以上が諫早市のスギ針葉に被害を与えたサクラサルハムシの概要であるが、別に中条博士から岡山県下でも今年(1962)夏に、同様本虫によるスギの被害を確認されたのご教示をいただいたので、本虫は時と場所によりスギの害虫にもなる一事例としてお知らせする。

種の同定ならびに種々ご教示ねがった中条博士に、また本誌上に記録をおすすめぐくださった芦塚部長に対して厚くお礼申し上げる。

#### 捕・虫・網

### 鎌倉瑞泉寺で虫供養

横須賀出張所と関係倉庫業者、くん蒸業者、その他21名が集まって11月10日鎌倉の瑞泉寺で虫供養を催した。大下住職の説経、回向があり、一同が虫界代表としてのコクヌストモドキの拡大原色像の前に焼香礼拝をして、日ごろ幾億幾万の害虫の生を奪った者たちがその在天の霊をなぐさめた。回向後、出張所長の講演があり、終わって別席で同寺自慢の普茶料理に舌づつみを打ち、薄暮の鎌倉の山を下りた。  
(横浜植物防疫ニュースNo.224から)

#### (7ページから続く)

ると、病徴および検出された菌から考えて、既往の病害とは一致しない。ただ病徴で述べた第3のタイプ、すなわち古い枝幹部のがんしゅ症状はがんしゅ病に類似しているし、このような被害部の一部でがんしゅ病菌を発見している。また被害林内にはアデロプス菌も一部に認められた。

以上述べたようにこの病気については調査を始めたばかりで不明な点が多い。しかし従来報告されていない新しい病気のようなものである。私どもはこの病気の徴候から、「ウラジロモミの先枯病」と呼ぶのが適切のように考えている。

この報告についてご指導をいただいた当场樹病研究室長千葉博士に厚くお礼申し上げる。

# 被害速報

## 森林病虫害獣被害(発生)状況

「速報カード」1962年12月20日から1963年2月28日までに到着の分の集計表

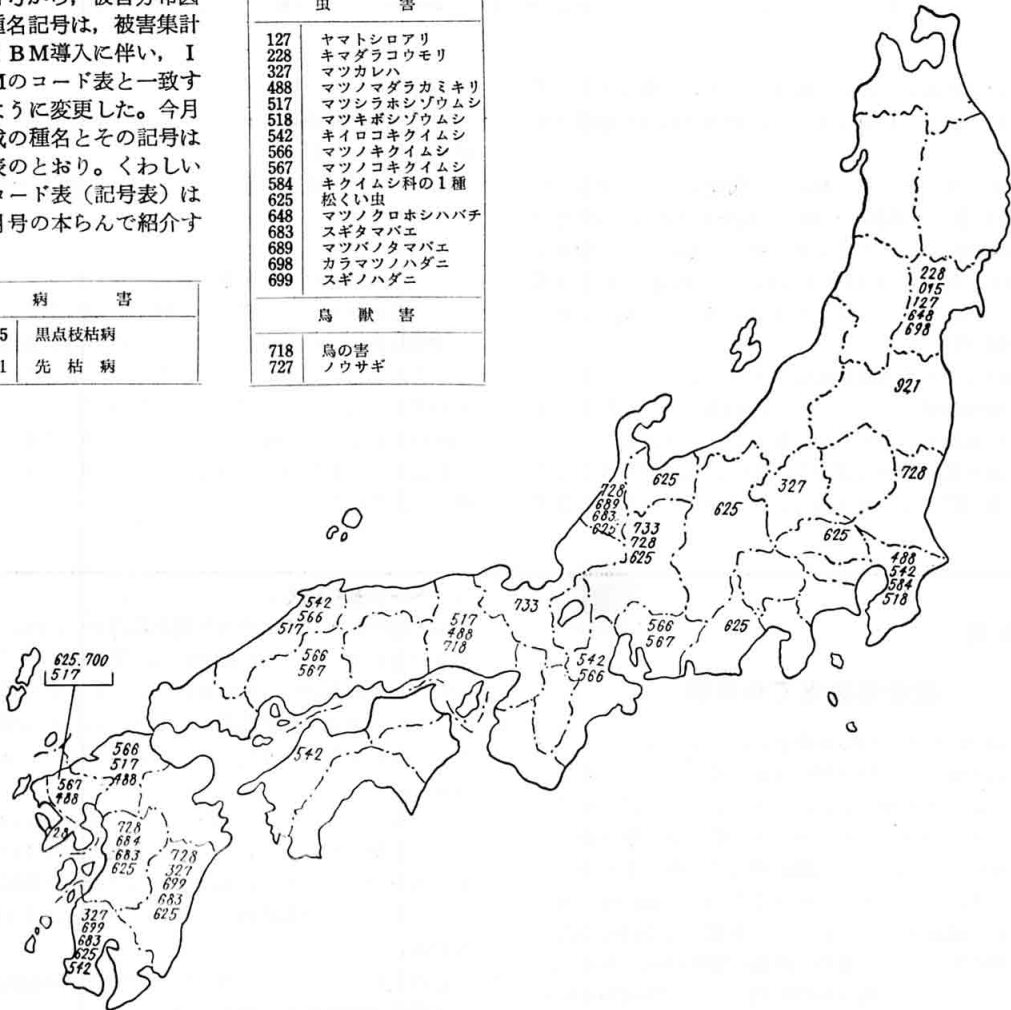
種類	松くい虫	松毛虫	クリタマチバ	スギノハダニ	マツバノタマバエ	マイマイガ	スギタマエ	ハバチ類	カラマツ先枯病
被害数量	22,897㎡	576ha	—	37ha	593ha	—	4,456ha	—	—
報告件数	50件	9件	—	3件	3件	—	18件	—	1件
	ノネズミ	その他病	その他害虫	その他害獣	計				
	4ha	3ha	19ha	94ha	—				
	1件	3件	8件	8件	104件				

今月号から、被害分布図の種名記号は、被害集計のIBM導入に伴い、IBMのコード表と一致するように変更した。今月掲載の種名とその記号は下表のとおり。くわしい全コード表(記号表)は来月号の本らんで紹介する。

病 害	
015	黒点枝枯病
021	先枯病

虫 害	
127	ヤマトシロアリ
228	キマダラコウモリ
327	マツカレハ
488	マツノマダラカミキリ
517	マツシラホシゾウムシ
518	マツキボシゾウムシ
542	キイロコケイムシ
566	マツノケイムシ
567	マツノコケイムシ
584	ケイムシ科の1種
625	松くい虫
648	マツノクロホシハバチ
683	スギタマバエ
689	マツバノタマバエ
698	カラマツノハダニ
699	スギノハダニ
鳥 獣 害	
718	鳥の害
727	ノウサギ

(北海道からは報告なし)



## 「被害速報らん」の改善について

全国でただ一つの森林防疫専門誌である森林防疫ニュースが、12年目にはいよいよ発展してきましたことは、読者のみなさんの絶大なご支援のたまものです。

編集委員会も、よりよい雑誌をつくるためかねて努力してまいりましたが、このたびその一環として、今までほう大なスペースを必要としていた「被害速報」らんをご覧のように改め、さらに内容ゆたかな誌面を構成していくことにいたしました。

したがって「速報」らんでは、特に必要と認められる被害のほかは、詳細には掲載しないことになりましたが、現地のSP, Ag, 担当区員などから送られてくる速報カードは、被害の現況を迅速には握するうえで、もっとも大切なものでありますから、今後とも、細大もらさずにどんどんお送りいただくよう、林野庁でも望んでおります。

「よりよい雑誌に……」というねがいは、読者のみなさんのおちからぞえなしに達成することはできません。かくべつのご愛読とご指導をおねがいいたします。

1963年2月 森林防疫ニュース編集委員会



# 退治ならヤッパリ

## 強力

# ラテミン

### 天敵に安全

しかも喫食が良好で、その上効果が速く適確です

### 使用が簡便

防水加工によりバラ撒きができ、経費も低廉です

農林省  
各営林局

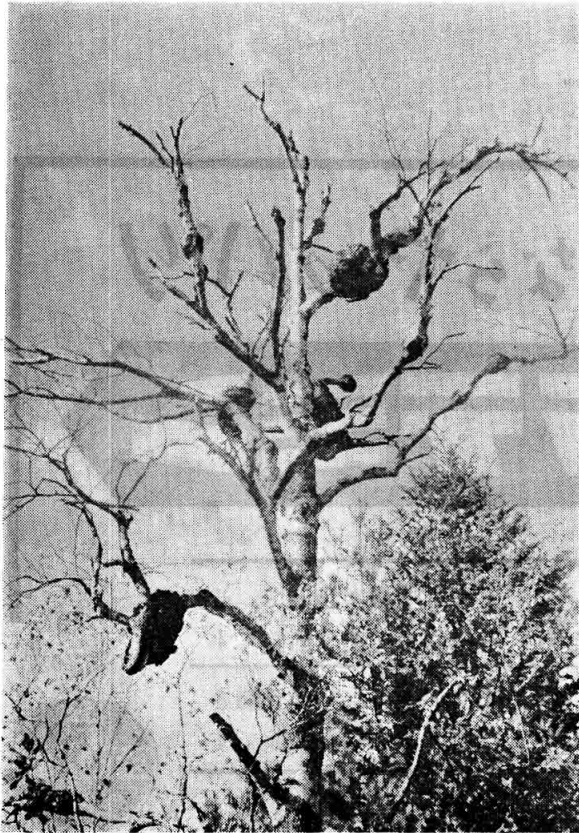
調達・全森連推奨・道森連選定

大塚薬品製品



東京・名古屋  
大阪・福岡

## 観察 | ヤドリギによるシラカバの被害 | 浜 武人



ヤドリギは、クヌギ、ナラ、クリ、ハンノキなどいろいろな樹種に寄生して被害をあたえることが知られ、本誌 Vol.9, No.3 に小林享夫技官が、ケヤキの被害を報告しているが、筆者は木曾山中でシラカバにこの被害の顕著な事例をみいだしたので、この状況を参考までにお知らせする。

被害のみられた場所は、長野県西筑摩郡開田村福島営林署新高国有林第315い林小班、昭和37年10月31日調査したところ被害木は御岳山麓の平坦な採草地中に散在する樹高約20m、胸高約35cm、樹齢約40年生のシラカバ天然生木で、この木の主要な枝ほとんどに写真のような巨大なこぶがみられた。木に登って調べてみたところ、こぶの表面にみられるヤドリギの青葉から、これはヤドリギによる被害と判明したものであるが、シラカバが枯死寸前である状態から考えて、甚だしい被害を与えていることが推定された。こぶは球形～隋円形で最も大きなものは長径70cm、短径50cmもあり、それから先はほとんど枯死しており、かつ枝が彎曲したりよじれていた。こぶの表面はそぞうで時に亀裂を生じ内部の材が露出しているものもあった。ヤドリギの種類は採集して帰りしらべたところ、ふつうのヤドリギ (*Viscum album* var. *Coloratum*) と判明した。  
(林業試験場木曾分場)

ヤドリギによるシラカバのこぶ病疑似被害  
長野・開田 1962. 10. (浜)